

**[B年] 受難節第4主日(2023年3月19日)****【旧約聖書日課】 出エジプト記 34章29～35節**

<sup>29</sup>モーセがシナイ山を下ったとき、その手には二枚の掟の板があった。モーセは、山から下ったとき、自分が神と語っている間に、自分の顔の肌が光を放っているのを知らなかった。<sup>30</sup>アロンとイスラエルの人々がすべてモーセを見ると、なんと、彼の顔の肌は光を放っていた。彼らは恐れて近づけなかったが、<sup>31</sup>モーセが呼びかけると、アロンと共同体の代表者は全員彼のもとに戻って来たので、モーセは彼らに語った。<sup>32</sup>その後、イスラエルの人々が皆、近づいて来たので、彼はシナイ山で主が彼に語られたことをことごとく彼らに命じた。<sup>33</sup>モーセはそれを語り終わったとき、自分の顔に覆いを掛けた。

<sup>34</sup>モーセは、主の御前に行って主と語るときはいつでも、出て来るまで覆いはずしていた。彼は出て来ると、命じられたことをイスラエルの人々に語った。<sup>35</sup>イスラエルの人々がモーセの顔を見ると、モーセの顔の肌は光を放っていた。モーセは、再び御前に行って主と語るまで顔に覆いを掛けた。

**【使徒書日課】****コリントの信徒への手紙二 3章4～18節**

<sup>4</sup>わたしたちは、キリストによってこのような確信を神の前で抱いています。<sup>5</sup>もちろん、独りで何かできるなどと思う資格が、自分にあるということではありません。わたしたちの資格は神から与えられたものです。<sup>6</sup>神はわたしたちに、新しい契約に仕える資格、文字ではなく霊に仕える資格を与えてくださいました。文字は殺しますが、霊は生かします。<sup>7</sup>ところで、石に刻まれた文字に基づいて死に仕える務めさえ栄光を帯びて、モーセの顔に輝いていたつかの間の栄光のために、イスラエルの子らが彼の顔を見つめえないほどであったとすれば、<sup>8</sup>霊に仕える務めは、なおさら、栄光を帯びているはずではありませんか。<sup>9</sup>人を罪に定める務めが栄光をまとっていたとすれば、人を義とする務めは、なおさら、栄光に満ちあふれています。<sup>10</sup>そして、かつて栄光を与えられたものも、この場合、はるかに優れた栄光のために、栄光が失われています。<sup>11</sup>なぜなら、消え去るべきものが栄光を帯びていたのなら、永続するものは、なおさ

ら、栄光に包まれているはずだからです。<sup>12</sup>このような希望を抱いているので、わたしたちは確信に満ちあふれてふるまっており、<sup>13</sup>モーセが、消え去るべきものの最後をイスラエルの子らに見られまいとして、自分の顔に覆いを掛けたようなことはしません。<sup>14</sup>しかし、彼らの考えは鈍くなってしまいました。今日に至るまで、古い契約が読まれる際に、この覆いは除かれずに掛かったままなのです。それはキリストにおいて取り除かれるものだからです。<sup>15</sup>このため、今日に至るまでモーセの書が読まれるときは、いつでも彼らの心には覆いが掛かっています。<sup>16</sup>しかし、主の方に向き直れば、覆いは取り去られます。<sup>17</sup>ここでいう主とは、“霊”のことですが、主の霊のおられるところに自由があります。<sup>18</sup>わたしたちは皆、顔の覆いを除かれて、鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられていきます。これは主の霊の働きによることです。

**【福音書日課】 ルカによる福音書 9章28～36節**

<sup>28</sup>この話をしてから八日ほどたったとき、イエスは、ペトロ、ヨハネ、およびヤコブを連れて、祈るために山に登られた。<sup>29</sup>祈っておられるうちに、イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた。<sup>30</sup>見ると、二人の人がイエスと語り合っていた。モーセとエリヤである。<sup>31</sup>二人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた。<sup>32</sup>ペトロと仲間は、ひどく眠かったが、じっとこらえていると、栄光に輝くイエスと、そばに立っている二人の人が見えた。<sup>33</sup>その二人がイエスから離れようとしたとき、ペトロがイエスに言った。「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」ペトロは、自分でも何を言っているのか、分からなかったのである。<sup>34</sup>ペトロがこう言っていると、雲が現れて彼らを覆った。彼らが雲の中に包まれていくので、弟子たちは恐れた。<sup>35</sup>すると、「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」と言う声が雲の中から聞こえた。<sup>36</sup>その声があったとき、そこにはイエスだけがおられた。弟子たちは沈黙を守り、見たことを当時だれにも話さなかった。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## 出エジプト記 34章29～35節

<sup>29</sup>モーセはシナイ山から下りた。山を下りるとき、彼は二枚の証しの板を手にしていた。モーセは、主と語るうちに彼の顔の肌が光を帯びていたことを知らなかった。<sup>30</sup>アロンとイスラエルの人々が皆モーセを見ると、彼の顔の肌が光を帯びていた。それで彼らはモーセに近づくことを恐れた。<sup>31</sup>モーセが彼らに呼びかけると、アロンと会衆の代表者たちが皆モーセのところに戻って来たので、モーセは彼らに語った。<sup>32</sup>その後、イスラエルの人々が皆近づいて来たので、モーセはシナイ山で彼に語られたことをことごとく彼らに命じた。<sup>33</sup>モーセは彼らに語り終えると、顔に覆いを掛けた。<sup>34</sup>モーセは、主の前に行って主と語る時は、出て来る時まで覆いを外していた。そして彼は出て来て、命じられたことをイスラエルの人々に告げた。<sup>35</sup>イスラエルの人々がモーセの顔を見ると、モーセの顔の肌は光を帯びていた。そこでモーセは、再び主と語るために中に入るまで、顔に覆いを掛けた。

## コリントの信徒への手紙二 3章4～18節

<sup>4</sup>私たちはキリストによって、このような確信を神に対して持っています。<sup>5</sup>何事かを自分のしたことと考える資格は、私たちにはありません。私たちの資格は、神からのものです。<sup>6</sup>神は私たちに、新しい契約に仕える資格を与えてくださいました。文字ではなく霊に仕える資格です。文字は殺し、霊は生かします。

<sup>7</sup>石に文字で刻まれた死をもたらす務めさえ栄光に包まれて、モーセの顔に輝くつかの間の栄光のために、イスラエルの子らはその顔を見つめることができなかつたとすれば、<sup>8</sup>まして、霊に仕える務めは、なおさら、栄光に包まれているはずではありませんか。<sup>9</sup>人を罪に定める務めに栄光があったとすれば、人を義とする務めは、なおさら、栄光に満ち溢れてるからです。<sup>10</sup>事実、かつて栄光を受けたものは、この場合、はるかに優れた栄光の前に、栄光を失ったのです。<sup>11</sup>やがて消え去るものが栄光を帯びていたのなら、永続するものは、なおさら、栄光に包まれているはずだからです。

<sup>12</sup>このような希望を抱いているので、私たちは堂々と振る舞い、<sup>13</sup>モーセが、やがて消え去るものの最後をイスラエルの子らに見られまいとして、顔に覆いを掛けたようなことはしません。<sup>14</sup>彼らの心かたくなにされたのです。今日に至るまで、古い契約が朗読されるときには、同じ覆いが除かれずに掛かったままです。それはキリストにあって取り除かれるものだからです。<sup>15</sup>実際、今日に至るまでモーセの書が朗読される時は、いつでも彼らの心には覆いが掛かっています。<sup>16</sup>しかし、人が主に向くならば、覆いは取り去られます。<sup>17</sup>主は霊です。そして、主の霊のあるところに自由があります。<sup>18</sup>私たちは皆、顔の覆いを除かれて、主の栄光を鏡に映すように見つめ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに変えられていきます。これは主の霊の働きによるのです。

## ルカによる福音書 9章28～36節

<sup>28</sup>この話をしてから八日ほどたったとき、イエスは、ペトロ、ヨハネ、ヤコブを連れて、祈るために山に登られた。<sup>29</sup>祈っておられるうちに、イエスの顔の様子が変わり、衣は白く光り輝いた。<sup>30</sup>見ると、二人の人がイエスと語り合っていた。モーセとエリヤである。<sup>31</sup>二人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最後のことについて話していた。<sup>32</sup>ペトロと仲間は、眠りこけていたが、目を覚ますと、イエスの栄光と、一緒に立っている二人の人が見えた。<sup>33</sup>その二人がイエスから離れようとしたとき、ペトロがイエスに言った。「先生、私たちがここにいるのは、すばらしいことです。幕屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのために。」ペトロは、自分でも何を言っているか、分からなかったのである。<sup>34</sup>ペトロがこう言っていると、雲が現れ、彼らを覆った。彼らが雲に包まれたので、弟子たちは恐れた。<sup>35</sup>すると、雲の中から、「これは私の子、私の選んだ者。これに聞け」と言う声がした。<sup>36</sup>この声がしたとき、イエスだけがそこにおられた。弟子たちは沈黙を守り、見たことを当時、誰にも話さなかつた。

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・3月19日「受難節第4主日」の日課主題は「主の変容」。

・旧約聖書日課は、「出エジプト記」から、掟の板を再授与されたモーセが民の前に現れたときの様子を告げる箇所。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙二」から、モーセの故事を引いて「文字」に優る「霊」の働きを説く箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、イエスが山の上で姿を変えて見せられた逸話を伝える箇所。

**旧約日課(出エジプト 34 章より)**

・「出エジプト記」は、ヘブライ語(ユダヤ教)正典「律法」の第二巻で、「申命記」まで続く「モーセ物語」を構成する第一の書。「モーセ誕生譚」をプロローグとして、神に使命を与えられたモーセが民をエジプトから導き出し、彼らが「シナイ契約」によって「神の民イスラエル」としてのアイデンティティを付与されるまでを物語る。これらの出来事は、「出エジプト記」自体の記述から、前13世紀の古代エジプト第19王朝時代を背景として想定していると考えられてきたが、古代エジプトの文献資料では「出エジプト記」に相当するような大規模な民の移住を確認できない。一方で、第19王朝の王ラメセス2世の後継王メルエンプタハ(在位＝前1212～1202年頃?)の碑文には、カナン地方遠征に際して対峙した諸民族のリストの中に「イスラエル」と呼ばれる非定住民族が含まれている。遡って前17～16世紀のエジプトにはセム系民族を支配者とする「ヒクソス」と呼ばれる第15王朝の時代が知られるように、エジプトとセム系諸民族の交流・対立は古い時代から大規模に見られた。正典「律法」の伝える「モーセ物語」は、その史実を検証することは困難であるが、後に「イスラエル・ユダ」という王国社会を形成した人々が自身のルーツとして信じるに足る「正史」としうだけの根拠となる出来事が起こっていたことを示すものと考えられる。その際に十分に考慮すべきなのは、この「モーセ物語」が、自分たちのルーツを明示的に「エジプト」としていることと共に、宗教的ルーツについては「シナイ山(＝ホレブ山)」としていことである。「出エジプト記」において「シナイ山」は明らかに特別な「神の山」であり、「聖地」たるべき場所であるが、モーセと彼の率いる民は、そこにとどまるのではなく、離れた地「カナン」を目指すことを強いられる。つまり、「シナイ契約」によってアイデンティティを付与された民である「イスラエル」は、まさにその「契約」の地である「シナイ山」という第一の「聖地」を喪失した民として自己理解することを求められている者たちとして描かれている。その「聖地」に代わるものが「掟の板(石の板)」に象徴される「律法(神の言葉)」であり、その「掟の板」を収めた「神の箱」とその安置場所である「幕屋」に重要な意味を付与されている。

・日課箇所は、いわゆる「金の雄牛像事件」を経て、モーセが最初に神から授与された「掟の板」を破壊してしまったため、請うて「掟の板」を再授与していただいた上で、これを携えて民のもとにモーセが立ち現われたという場面を描く。「金の雄牛像事件」は、「民の背信」を描くものであるが、より大きな文脈から見れば、むしろそのような主題は二義的なものであり、第一義的には、「モーセの提示する神は、どのような姿の者として認知されるのか」という「神論」をめぐる神学問題が提起される故事として理解されるべきである。メソポタミアでもエジプトでも、神像が「神の箱」に類する「神輿」に乗せられて運ばれていたことが知られている。「神像」は、それ自体が「神」であるという「偶像」的な意味で理解されることもあるが、実際には、信じる「神」の現臨を象徴するしるしとして扱われていたものであり、必要に応じて再製作されもしたものであるが、信じる「神」を象徴するという意味で、再製作に際しては厳密に従前の「神像」と同じ様式であることが求められた。このような宗教観念を背景として描かれる「モーセ物語」の「掟の板」は、「金の雄牛」等ほかの「神」を象徴する「神像」に代わるものとして位置づけられる一方、明示的な「神像」であることを避けているという点が特徴となっている。このような「神像」を避ける神観は、必ずしもイスラエル・ユダヤ教に特異的なものではなく、代表的にはペルシア系宗教のゾロアスター教がそうであるし、「ナバテア人」として知られるようなアラビア砂漠の遊牧民の中にも「神像」を忌避する神観を有していたことが知られる人々がある。

・日課箇所では、シナイ山で神から「掟の板」を授与されてきたモーセの顔が光り輝いていたことが強調されている。モーセは、「神像」では象徴されえない神(主)を民に提示する「祭司」の役割を担っており、彼が提示する「神」が「掟の板」と共に現臨していることを示す現象として「光」に焦点が当てられているのであろう。ここには、本来自分たちの信じる「主」なる神を象徴する「掟の板」と、それをもたらした人物としての「モーセ」を同一視するある種の錯誤が生じているようにも考えられるが、「掟の板」の本質として「神の言葉(律法)」が据えられていることから推認すれば、その「神の言葉」を民に語って聞かせる「人」が不可欠であることから両者が事実上同一視されるような見方が避けられないのであろう。

**使徒書日課(Ⅱコリント 3 章より)**

・「コリントの信徒への手紙二」は、「パウロ書簡集」に収められた書簡文書で、パウロが自ら創設に携わったコリントの教会共同体に宛てて著した一連の書簡の一つ。コリントには、パウロを支持する信者ばかりでなく、彼を指導者と認めない者たちも存在したが、それは、別の指導者の影響下にあったからというばかりではなく、パウロ自身の振る舞いに対する疑念があつてのことだったと考えられる。おそらく、一部の者たちからパウロは、「神の言葉を売り物に」(2:17)していると

か、「自分を推薦し始めている」(3:1)、等の非難を向けられていた。それは、パウロが確信をもって「モーセの書(=律法)」の斬新な解釈を主張していたことが、一つの要因であった。そこで、彼は、なぜそのような「律法」解釈を為し得るのかということの基礎理論として、「霊」の授与を提示するのが、日課箇所である。

・パウロは、「手紙一」でも再三、「聖霊」「神の霊」を取り上げている。パウロの宣教において「聖霊」論は間違いなく重要な位置を占めているが、彼の神学的基盤たる「律法」理解の中では、必ずしも「聖霊」論が大きな位置を占めているわけではないとも考えられる。おそらくパウロは、当時の一部の教会共同体に見られた「聖霊」論的な強調に応答するために、自分自身の「聖霊」論を組み立て、「教会」論の中に組み込むことを考えていたのだろう。

### 福音書日課(ルカ9章より)

・日課箇所は、いわゆる「主の変容(変貌)」の逸話を伝える箇所。「共観福音書」は、「ペトロの信仰告白と主イエスの受難予告」の出来事に続く出来事としてこの逸話を位置づけるひとまとまりの伝承群の中で、これを伝えている。

・「山」の上でのイエスの変貌の姿は、故事で知られる「モーセ」と同じ姿を示している。ここに「エリヤ」が登場するのは、当時のユダヤ教限界で、「死なずに天に上げられた者」として「モーセ」と並んで「エリヤ」が知られていたからであろう。ただし、「天に上げられる」ことは、「不死」を意味する以上に、「神と近い」ことを示していたと考えられる。すなわち、「旧約」において、彼らは「葬り」について知られていない者として描かれているだけである(申 34:6、王下 2:11~12)。福音書は、主イエスを、彼らと似た者として理解しようとしている。「エリヤ」は、「モーセ」と関連の深い「シナイ山(ホレブ山)」との結びつきでも知られる(王上 19章)。

・33節「仮小屋(スケネー)」は、「天幕/幕屋」を意味する語。「モーセ物語」の「幕屋」を参照。

### 来週の誕生日 (3月19日~25日)

#### 主日礼拝の讚美歌から

・21-303 番「丘の上の主の十字架」(= II 182 番)は、米国メソジスト派の伝道者 J. ベナードの作詞作曲、初演は 1913 年で、以降、ラジオ放送や大規模な伝道集会で歌われて大衆的讚美歌として普及。原題は「古い荒削りの十字架」。

・21-515 番「きみのたまものと」(= II 188)は、19-20 世紀米国バプテスト派牧師で大学教員など教育畑で活動したグローズの作詞。曲は 19 世紀英国の女性ピアニスト・バーナードの作曲。

・21-285 番「高き山の上」(= II 44 番)は、15 世紀英国のセーラム典礼聖務日課書に「イエスの変貌の祝日」のための聖歌として収められたラテン語聖歌。曲は、18 世紀フランスで発行された聖歌集から。

### 21-303「丘の上の主の十字架」

#### On a Hill far away

1. On a hill far away stood an old rugged cross, / the emblem of suffering and shame; / and I love that old cross where the dearest and best / for a world of lost sinners was slain.

Refrain:

*So I'll cherish the old rugged cross, / till my trophies at last I lay down; / I will cling to the old rugged cross, / and exchange it some day for a crown.*

2. O that old rugged cross, so despised by the world, / has a wondrous attraction for me; / for the dear Lamb of God left his glory above / to bear it to dark Calvary.

3. In that old rugged cross, stained with blood so divine, / a wondrous beauty I see, / for 'twas on that old cross Jesus suffered and died, / to pardon and sanctify me.

4. To the old rugged cross I will ever be true; / its shame and reproach gladly bear; / then he'll call me some day to my home far away, / where his glory forever I'll share.

### 21-515「きみのたまものと」

#### Give of your best to the Master

1. Give of your best to the Master, / Give of the strength of your youth; / Throw your soul's fresh, glowing ardor / Into the battle for truth. / Jesus has set the example, / Dauntless was He, young and brave; / Give Him your loyal devotion, / Give Him the best that you have.

Refrain:

*Give of your best to the Master; / Give of the strength of your youth, / Clad in salvation's full armor, / Join in the battle for truth.*

2. Give of your best to the Master, / Give Him first place in your heart; / Give Him first place in your service, / Consecrate now ev'ry part. / Give and to you shall be given; / God His beloved Son gave; / Gratefully seeking to serve Him, / Give Him the best that you have. [Refrain]

3. Give of your best to the Master, / Naught else is worthy His love; / He gave Himself for your ransom, / Gave up His glory above; / Laid down His life without murmur, / You from sin's ruin to save; / Give Him your heart's adoration, / Give Him the best that you have. [Refrain]

### 21-285「高き山の上」

#### O Wondrous Type (O Wondrous Sight)

1. O wondrous type! O vision fair / Of glory that the Church shall share, / Which Christ upon the mountain shows / Where brighter than the sun He glows!

2. From age to age the tale declare / How with the three disciples there, / Where Moses and Elias meet, / The Lord holds converse high and sweet.

3. With shining face and bright array, / Christ deigns to manifest to-day / What glory shall be theirs above / Who joy in God with perfect love.

4. And faithful hearts are raised on high / By this great vision's mystery; / For which in joyful strains we raise / The voice of prayer, the hymn of praise.

5. O Father, with the eternal Son, / And Holy Spirit, ever One, / Vouchsafe to bring us by Thy grace / To see Thy glory face to face. / Amen.